

日本英文学会関西支部 第16回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2021年12月18日（土）11：00より

開催方法：Zoomを用いたオンライン開催（同時双方向配信）

日本英文学会関西支部事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学 文学部 英米文学専攻内

E-mail: kansai2@elsj.org

※お知らせ

今年度大会は、Zoom を用いたオンライン開催（同時双方向配信）となります。

参加方法の詳細につきましては、後日お知らせします。

日本英文学会関西支部第 16 回大会プログラム

日時：2021 年 12 月 18 日（土）11：00 より

開催方法：Zoom を用いたオンライン開催（同時双方向配信）

開 会 式 11：00 より

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 竹村 はるみ

研究発表 第 1 発表 11：10～11：50 第 2 発表 12：00～12：40
第 3 発表 13：30～14：10 第 4 発表 14：20～15：00

第 1 室

司会 同志社大学教授 下 楠 昌 哉

1. ユングで読む *Dracula*——影とアニメ

龍谷大学講師 谷 綾 子

2. 『鬼滅の刃』のソースとして Bram Stoker, *Dracula* (1897) を読み直す

近畿大学教授 吉 田 朱 美

司会 関西学院大学教授 宮 原 一 成

3. 「石」と「犬」とハリー・ポッター——『賢者の石』と『アズカバンの囚人』におけるダーズリー氏のいじめ
京都大学大学院生 杉 野 久 和

4. *The Human Factor* 再読——Sarah の物語を中心に

神戸親和女子大学准教授 藤 田 眞 弓

第 2 室

司会 大阪大学教授 山 田 雄 三

1. 『無神論者の悲劇』における "nature" の意義

関西学院大学大学院生 中 根 有 紀 子

司会 龍谷大学教授 川 島 伸 博

2. 感情とシンボルの合一：Keats の「詩」の構想

京都大学大学院生 虹 林 桃 子

3. 【招待発表】 受難の力——Herbert, “The Thanksgiving”, “Dialogue” および “The Cross” を読む
神戸市外国語大学教授 西川 健 誠

4. (発表なし)

第3室 司会 神戸女子大学名誉教授 木下 由紀子

1. (発表なし)

2. 童話からみたワイルドの芸術理論

武庫川女子大学大学院生 森元 奈 菜

司会 武庫川女子大学教授 玉井 暁

3. ブランウェル・ブロンテと地図の翻案——ブラックウッズ・エディンバラ・マガジンへの信用

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野 百合

4. 【招待発表】 ペイター、ワイルドにおける美的距離とその行方——『ドリアン・グレイの肖像』を中心に

大阪市立大学教授 野末 紀之

第4室 司会 近畿大学教授 吉野 成 美

1. *Little Women* に見る新たな時代の女性像

関西外国語大学大学院生 陳 懌 懿

2. Edith Wharton, *A Motor-Flight Through France* に描かれる自動車の旅——旅のロマンスの復活——

大阪樟蔭女子大学准教授 水口 陽 子

司会 立命館大学教授 吉田 恭 子

3. 神を見る “Star-Gazer” ——*Mason & Dixon* における科学と宗教

大阪大学教授 石割 隆 喜

司会 京都工芸繊維大学准教授 竹井 智 子

4. 【招待発表】 「手」の秘密——Henry James, *The Portrait of a Lady* における女性表象——

神戸市外国語大学教授 難波江 仁 美

第5室 司会 近畿大学教授 平井 大 輔

1. (発表なし)

2. 分詞構文の統語構造

関西外国語大学助教 山 口 真 史

司会 奈良教育大学准教授 米 倉 よう子

3. including の語法に関して

明海大学講師 林 智 昭

4. 【招待発表】動詞 destroy の意味論——使役の持続性と動詞のアスペクト特性——

神戸学院大学教授 出 水 孝 典

シンポジウム 15 : 20~17 : 40

英米文学部門

分断の時代の孤独 / 融和

司会・講師	関西学院大学教授	松 宮 園 子
講師	京都府立大学非常勤講師	田 中 祐 子
講師	京都女子大学教授	金 澤 哲 彦
講師	関西学院大学教授	横 内 一 雄

英語学部門

前置詞をめぐる形式と意味

司会・講師	京都女子大学教授	松 原 史 典
講師	高知大学助教	佐 藤 亮 輔
講師	京都女子大学准教授	谷 光 生
講師	福岡大学教授	毛 利 史 生

総 会 17 : 40 より

閉会式 18 : 00 より

挨拶 日本英文学会関西支部副支部長 山 田 雄 三

研究発表要旨

第1室

司会 同志社大学教授 下 楠 昌 哉

第1発表 (11:10 より)

ユングで読む *Dracula* ——影とアニマ

龍谷大学講師 谷 綾 子

Dracula(1897)の物語はイギリスの弁護士 Jonathan Harker が東欧 Transylvania にやってくるころから始まる。Edward Said は東洋とは西洋が認めたくない事柄(官能性、退廃)の投影先であると指摘する。つまり西洋人である Jonathan が西洋の無意識界とされる東欧 Transylvania で体験する出来事には、Jonathan 自身が無意識下に抑圧している性的願望が反映されていると考えることができる。本発表では Jonathan 及び彼と強い連帯感で結ばれる男達が、西洋の無意識を表象する東の悪魔 *Dracula* を倒す過程が Carl Gustav Jung における自己実現のモデルに近いことに着目し、Jung の個性化のモデルを通して *Dracula* の登場人物達の精神的成長について考察していく。

第2発表 (12:00 より)

『鬼滅の刃』のソースとして Bram Stoker, *Dracula* (1897) を読み直す

近畿大学教授 吉 田 朱 美

映画『鬼滅の刃』は2020年秋の公開以来、コロナ禍にもかかわらず多くの観客を集め、記録的ヒットとなったが、人気の秘密としてその物語内容がまさにコロナ禍の状況とフィットするものであったからだということ是一条真也『「鬼滅の刃」に学ぶ——なぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたのか』などの著作において指摘されている。だがなぜ、感染症の恐怖を予言的な形で巧みに織り込んだような物語が作られ得たのか。それを可能とした要因の一つとして、作者の吾峠呼世晴氏が Bram Stoker の *Dracula* から着想の多くを得ていたこと、その *Dracula* 中の吸血鬼イメージに既に感染症への恐怖が織り込まれていたということは見逃せない。ではヴィクトリア朝の吸血鬼物語が設定を変えつつ、現代日本において語り直されることによって、*Dracula* に織り込まれた当時のイデオロギーが巧みに再生産されてしまっているというような側面はないだろうか。

第3発表 (13:30 より)

「石」と「犬」とハリー・ポッター

——『賢者の石』と『アズカバンの囚人』におけるダーズリー氏のいじめ

京都大学大学院生 杉野久和

ハリーに対するダーズリー家による「いじめ」とその逆転劇は、言語的にも周到に仕掛けられており、さらには、その巻における物語の展開を暗示している。本発表では、ダーズリー家の「いじめ」に際して、ハリーが「石」や「犬」に結び付けられていることを指摘したい。『賢者の石』第四章では、ハリーが魔法学校ホグワーツ入学の手紙を受け取り、ダーズリー家とハリーの優劣関係が揺るがされるのだが、ここでは物語だけでなく言語的にも優劣関係が解体されている。そして、『アズカバンの囚人』第二章においても、ダーズリー家はハリーに対して嫌がらせをしているのだが、ここでも言語的に優劣関係が入れ替わり、マージおばさんの膨張に代表されるハリーの仕返しへと展開している。また、作品 J. K. Rowling の言葉遊びを考慮すれば、第三巻『アズカバンの囚人』第二章における逆転劇の伏線として、第一巻『賢者の石』第二段落で‘beefy’という語が用いられたという創作順序も明らかとなる。

第4発表 (14:20 より)

The Human Factor 再読

——Sarah の物語を中心に

神戸親和女子大学准教授 藤田真弓

Chimamanda Ngozi Adichie の *Americanah* (2013)には英語圏作家への言及があり、中でも Graham Greene の名は4回プロット上重要な箇所が登場する。

Greene は MI6 諜報員としてのシエラレオネ滞在と3回のアフリカ旅行を経験し、西アフリカのイギリス植民地が舞台の作品やアフリカ旅行記を執筆している。

Adichie はナイジェリアから渡米し、移民の現実に直面しながらも逞しく生きる女性を描いているが、Greene は異国で生きる女性をどのように描いているのか。本発表は南アフリカ共和国の内情が背景としてある *The Human Factor* (1978)を、Castle のモスクワ逃亡後英国に残された Sarah を描く Part6 を中心に、「第二の改宗」と言われるリベリア旅行に同伴した従妹 Barbara や、*The End of the Affair* (1951)のもう一人の Sarah と関連付けながら分析する。

第2室

司会 大阪大学教授 山田 雄三

第1発表 (11:10 より)

『無神論者の悲劇』における"nature"の意義

関西学院大学大学院生 中根 有紀子

『無神論者の悲劇』はシジル・ターナーによって書かれた現存する唯一の劇であり、当時盛んに書かれた復讐劇の一つに数えられる。この劇は 50 年ほど前までは少ないながらも研究されていたが、今ではほとんど目を向けられることはない。しかし他の復讐劇と大きく異なる点は、主人公ダンヴィルのマキャヴェリアンのような自身の利益を追求する行動が、彼の「自然」への絶対的信頼に基づいていることである。本発表の目的は、ジョルダノ・ブルーノなどの唯物論的自然主義者の思想を軸にして、ダンヴィルにとっての「自然」が何を意味しているのか、また彼が最終的に「自然」を手放したことが物語全体にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることである。

司会 龍谷大学教授 川島 伸博

第2発表 (12:00 より)

感情とシンボルの合一：Keats の「詩」の構想

京都大学大学院生 虹林 桃子

Keats の詩作品には人間の生命と芸術が、詩人の感情と洗練された名句の対比として絶えず表される。この対比構造は 1818 年後半以降の詩作品の中で、次第に人間的感情と、その感情を介さないシンボルの合一へと変化していく。オード群の“Ode to a Nightingale”や“Ode on a Grecian Urn”を例にとると、詩人の苦痛や喜びといった感情が、それぞれの主題が示す芸術のシンボルに取りこまれ、昇華されているのが見られる。

ギリシャ神話の影響を鑑みると、Keats の描く人間的感情は Dionysus 的、芸術のシンボルは Apollo 的であり、この両者は Friedrich Nietzsche の『悲劇の誕生』において非造形的芸術と造形的芸術に相当する。両者の合一は Titan 族の滅亡と Apollo の誕生という、詩の誕生と発展の物語として解釈し得る *Hyperion: A Fragment* が示すように、人間的感情を芸術のシンボルに昇華するという Keats の詩作法に類似する。

本発表は、人間的感情と芸術のシンボルの合一という詩作法を用いることで、Keats がどのように詩作品の中で Dionysus 的感情を Apollo 的芸術に昇華しようとしたのか明らかにしようとするものである。

第3発表 (13:30 より)

【招待発表】

受難の力

——Herbert, “The Thanksgiving”, “Dialogue” および “The Cross” を読む

神戸市外国語大学教授 西川 健 誠

キリストの受難は信仰者にとり特別の意味を持つ事績だ。本発表では、ハーバート (George Herbert, 1593-1633) の宗教詩において受難がどう語り手を動かしているかを考える。自らの功により受難による贖罪に報いようとする語り手がその虚妄を痛感させられ言葉を失う例もあれば (“The Thanksgiving”)、逆に功のなさを理由に、受難に極まる神の好意の固辞を重ねた末、その固辞じたいが裏返しの傲慢である事を悟らされてやはり言葉を失う例もある (“Dialogue”)。また、志して聖職入りしたにも拘わらず味わった挫折感を嘆きながら、その挫折感そのものを、受難に向かう前のキリストのことばを用いながら神への奉獻とするに至る例もある (“The Cross”)。神の圧倒的恩寵の体現として語り手に自らの行動の無力を意識させる一方、語り手に従順の証として自らの不全感を行動の上で受け入れよう促すものとして描かれる事で、受難という事績の感化力が詩中で証されているといえる。

第4発表 (14:20 より)

(発表なし)

第3室

司会 神戸女子大学名誉教授 木下 由紀子

第1発表 (11:10 より)

(発表なし)

第2発表 (12:00 より)

童話からみたワイルドの芸術理論

武庫川女子大学大学院生 森 元 奈 菜

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) は、生涯で2冊の童話集を出版している。先行研究の中で、ジャラス・キレーン (Jarlath Killeen) は、ワイルドの童話は多くの批評家から注目されていたが、ワイルドのイメージと童話の内容がかけはなれているため、他のワイルド文学とは無関係なものだと研究者から考えられてきたと指摘している。そこで本発表では、1888年に出版された『幸福な王子、そのほかの物語』 (*The Happy Prince and Other Tales*) の「幸福な王子」(‘The Happy Prince’)、 「ナイチンゲールとばらの花」(‘The Nightingale and the Rose’)、 「わがままな大男」(‘The Selfish Giant’) を主な対象とし、同時代に書かれた批評論文である「嘘の衰退」(‘The Decay of Lying’) で言及されているワイルドの芸術理論との関係性をこの3つの童話作品の中で明らかにしたい。

第3発表 (13:30 より)

ブランウェル・ブロンテと地図の翻案

——ブラックウッズ・エディンバラ・マガジンへの信用

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野 百合

ブランウェル・ブロンテ(1817-1848)は、ブラックウッズ・エディンバラ・マガジンに掲載された地図をもとに、グラスタウン物語の舞台であるアフリカ西海岸の地図を描いた。ブランウェルが作成した地図は、他者の証言によって得られた知識の集積であるジェイムズ・マクイーン(1778-1870)の地図をもとに、想像力を加味して作成された、云わば地図の翻案と言えよう。本発表では、ブランウェルの地図に影響を与えたマクイーンの偉業について、地理学の観点から検証する。歴史地理学者チャールズ・ウィザーズは、マクイーンの地図には「啓蒙主義後期における見聞による証言の信用性、及び信憑性」(2004)が裏打ちされていると述べた。このことがブランウェルのマガジンに対する信用と、グラスタウンの地図作成においても表出されていることを明らかにしたい。

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】

ペイター、ワイルドにおける美的距離とその行方

——『ドリアン・グレイの肖像』を中心に

大阪市立大学教授 野末 紀之

ペイターの『ルネサンス』(1873)の「序文」と「結語」にみられる唯美主義の特徴のひとつは、芸術作品の存在によって享受者の内面に刻印される「印象」の言語的追究である。主体はきわめて不安定なものでありながら、客体との距離を保ちつつ内面に、また言語に沈潜する。保守派はこれを、作者の非(反)社会性やエゴイズムの徴として非難した。ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(1891)の主人公は、みずから恋人の自殺を招いておきながら苦痛を感じることができないと述べ、人生の苦痛から逃れるには観客になればよいと嘯く。こうした「距離化」は保守派のみならず一般読者の非難を容易にかき立てるだろう。ペイターの書評にあるように、これは登場人物への作者の「インパーソナルな」姿勢を示すのか、あるいは何らかの戦略によるのか。この点について考察する。

第4室

司会 近畿大学教授 吉野成美

第1発表 (11:10 より)

Little Women に見る新たな時代の女性像

関西外国語大学大学院生 陳 憚 懿

本発表では、Lousia Alcott の *Little Women* の物語を取り上げ、従来自伝的な口当たりの良い児童小説と捉えられてきた本作を、四女の Amy March に着目することで、新時代において女性たちが世界を主導するという進歩的な世界観が提示されていることを論証する。Amy は Jo のような派手なふるまいはしないが、芸術を目指す高い志を持ち、そうでありながら自らの才能の限界を認識した上で社会貢献を果たしていると考えられる。Amy の持つ男性観も、芸術的な内面を備える点に惹かれることから、Amy は家庭と社会を先導するキャラクターとして描かれると考えられる。March 家の Siblings 像を、Amy を中心に考察することで、*Little Women* が新たなジェンダー観が展開された、野心的でかつ魅力的な小説であることを実証したい。

第2発表 (12:00 より)

Edith Wharton, *A Motor-Flight Through France* に描かれる自動車の旅

——旅のロマンスの復活——

大阪樟蔭女子大学准教授 水口陽子

ウォートンは生涯を通して絶え間なく旅をしていたと言っても過言ではない。1908年に出版された本作はウォートンの初めての旅行記であり、1906年から1907年の3度の旅が元となっている。タイトル通り、自動車の旅の魅力に満ちた旅行記であり、旅の手段が馬車や鉄道から車に変わったことによる旅の変化と自動車旅行の素晴らしさを謳っている。ウォートンは、長く失われてしまっていた初期の旅の魅力を取り戻したと述べている。

本発表では、優れたフランス旅行のガイドブックとも評される *A Motor-Flight* を詳細に読み、従来までの列車による旅が自動車の登場によってどのように変化し、旅行者の視点がどのように転換しているのかに注目しながら、自動車の旅によって可能となる旅の視点とその言説を分析する。車という移動手段の登場による、ウォートンが言うところの、「旅というロマンス」の復活について考察する。

司会 立命館大学教授 吉田 恭子

第3発表 (13:30 より)

神を見る“Star-Gazer”——*Mason & Dixon*における科学と宗教

大阪大学教授 石割 隆喜

*Mason & Dixon*における宗教は近代科学や合理主義に依らない別の現実の可能性を示唆するものとされてきた。だが“Star-Gazer”である二人の主人公 Charles Mason と Jeremiah Dixon は金星の太陽面通過という天文現象に神の働きを見る。これは、Pynchon の天体観測者たちが科学的探究をキリスト教信仰の一形態とした科学者である Galileo、Kepler、Newton の直系の後継者であることを示している。ガリレオは「宇宙という書物」から「全能の神の栄光と偉大さ」を読み取り、ケプラーは入れ子状に配置された正多面体を宇宙創造のための神のプランとした。ニュートンは太陽と惑星と彗星からなる美しい体系は神の「深慮と支配」からのみ生じ得たとした。メイソンとディクソンが実践する科学が宗教と分離不能な一面をも併せ持つことを、彼らの「見る」という行為に注目して論じてゆく。

司会 京都工芸繊維大学准教授 竹井 智子

第4発表 (14:20 より)

【招待発表】

「手」の秘密

——Henry James, *The Portrait of a Lady* における女性表象——

神戸市外国語大学教授 難波江 仁美

Henry James (1843-1916)の *The Portrait of a Lady* (1881)を三分の一ほど読み進んだあたり、タチェット夫人からイザベルに多額の遺産が付与されると聞いたマール夫人が、膝の上に組んでいた「手」を胸元へ持ち上げて降ろすという場面がある。この後、夫人は元愛人オズモンドとイザベルとの結婚を画策することになるが、はたしてこの一瞬の手振りにその意図が投影されていたのだろうか。James の兄で心理学者 William James の「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という論理に基づけば、「手」が動いたから夫人の欲望が意識化されたことになる。この「手」(身体性)と意識との関係は、イザベルをはじめ他の女性の描写にも違った形で見いだせるように思われる。NY版「序文」(1908)で、George Eliot が女性を“frail vessels”と称したことに言及した James だが、女性を単なる「器」(“vessel”)とは考えていないだろう。本発表では「手」の描写に注目し、舵を握る「手」を備えた「船」(“vessel”)としての動的な女性表象の可能性を考えてみる。

第5室

第1発表 (11:10 より)

(発表なし)

司会 近畿大学教授 平井大輔

第2発表 (12:00 より)

分詞構文の統語構造

関西外国語大学助教 山口真史

本発表は分詞構文と独立分詞構文の統語構造について論じる。これらの構文は、用いられる述語の範疇が共通しており、また否定辞 *not* の語順に関する統語的類似性がありながらも、統語論からは統一的説明がされていない。先行研究では *PRO* を仮定する分詞構文に対する分析と *IP (TP)* 構造を仮定する独立分詞構文に対する分析を概観し、どちらの分析でも統一的に当該の構文を説明できないことを指摘する。代案として、本研究では機能範疇 *Pred (Bowers 1993)* が指定部に *DP* を、補部に *vP* を取る構造を提案する。*DP* は独立分詞構文であれば顕在化されるが、分詞構文でも主語名詞が顕在的に用られる場合があるため、分詞構文では *DP* が通常削除されると主張する。また格認可に関して、同様に *Pred* を仮定されている類似現象を例に挙げ、*Pred* が名詞の格を認可していると主張する。本提案によって分詞構文・独立分詞構文の特徴を説明できる。

司会 奈良教育大学准教授 米倉よう子

第3発表 (13:30 より)

including の語法に関して

明海大学講師 林智昭

concerning, considering 等の動詞派生前置詞 (秋元 2002: 49) は、現在分詞から発達した文法化現象とされる。本発表は、語法研究として、*including* が (i) 動詞としての特徴が強く保たれている例で、(ii) 動詞派生前置詞の特徴を備えつつも話し言葉における生起がみられることなどを論じる。『リーダーズ英和辞典』『ジーニアス英和大辞典』や *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 等を見ると、*including* は *excluding* の対義語としての「前置詞」と分類されている。しかし *OED* においては「前置詞」と分類されていない。*including* は、「除外」の意味をもつ前置詞 (*but, except, without, barring, excluding*) と異なる意味を持つため、動詞的特徴を持ちつつも「前置詞」として位置づけられる理由と考えられる。

第4発表（14:20より）

【招待発表】

動詞 *destroy* の意味論

——使役の持続性と動詞のアスペクト特性——

神戸学院大学教授 出水孝典

Levin と Rappaport Hovav の語彙意味論、およびその中心テーマとなっている様態・結果の相補性に従うと、*destroy* は「破壊する」を表わす結果動詞である。また、これまで多くの言語学研究者によって指摘されてきたように、*destroy* はもっぱら他動詞で用いられ自他交替しない（自動詞用法を欠く）が、その決定的な理由は明確にされていない。本発表では、(i) Härtl (2003) に従い他動詞用法のみで用いられる動詞は、動作主や原因による持続的使役が必要であること、(ii) (i) のように考えることで、従来アスペクト研究で指摘されてきた *destroy* が Accomplishment だという事実がその必要条件となること、(iii) *destroy* の実例の出版されている日本語訳で用いられている訳語は(i)(ii)を示唆するもので、目的語から読み込まれる様態を含みうること、という三点を示す。

シンポジウム要旨

英米文学部門

分断の時代の孤独 / 融和

司会・講師	関西学院大学教授	松 官 園 子
講師	京都府立大学非常勤講師	田 中 祐 子
講師	京都女子大学教授	金 澤 哲
講師	関西学院大学教授	横 内 一 雄

シンポジウムのねらい

2020年から続くコロナ禍の世界の新たな常識となった「ソーシャル・ディスタンシング」は、社会の様々な側面における孤独を炙り出すこととなった。教育現場及び職場のリモート移行、共同体における交流の場の消滅、更には経済的打撃をもたらす格差拡大により孤立を深める個人は、不安定な政治状況、そしてテクノロジーへの過度な依存から、時に差別と暴力に走り、その結果、社会の分断の加速が懸念されている。しかしこの孤独、そして分断という問題が今日の状況において改めて可視化されたとはいえ、元来普遍的なテーマであることは言うまでもない。見え始めたポスト・コロナの時代においても、この問題が複雑さを増すことは不可避と予想される中、18世紀から現代に至る幅広い時代の諸テキストに描き出された孤独の諸相に向き合い、そこに浮かび上がる「孤」及び「個」の多様な在り方、更には分断の先の融和と対話の可能性について議論していきたい。

スウィフトの諸作品にみる「分断の時代」における融和の可能性

京都府立大学非常勤講師 田 中 祐 子

21世紀初頭は様々な「分断」がメディアを通じて伝播されている。イギリスの18世紀は、名誉革命(1688年)を経て政党政治が始まり、党派抗争による分断、イングランドとスコットランドの合邦(1707年)、ジャコバイトの反乱(1715年、1745年)、アメリカの独立(1783年)など、「統合」と「分断」が激化した時代であった。アン女王時代からハノーヴァー時代にかけて、スウィフトは多くの政治論を残している。しかしながら、私見ではスウィフトは公共的知識人であって、党派的な人間ではなかった。説教集なども参照すると、彼が健全な精神をもった文明人としてイングランド人も、スコットランド人も、アイルランド人も相互に理解しあって「孤独と分断」の現実を超えていくことを願ったことが浮かび上がる。スウィフトは文筆を通じて、どのように分断や孤独と向き合い、融和の糸口を示したのかを一考したい。

孤独／友をめぐるパラドクス

京都女子大学教授 金澤 哲

孤独に苦しむ者が、何より求めるのは友であろう。だが、その「友」とは、どのような存在なのであろうか。もし「友」がもう一人の自分であるならば、「友」との友愛は自己愛とどう違うのだろうか。一方、「友」が畢竟他者であるならば、「友」を特別な存在とするものは何であろうか。

デリダ『友愛のポリティクス』は、「友」・「友愛」に関わる多くの逆説をめぐる論考である。その議論はアリストテレスに帰せられる言葉「おおわが友たちよ、一人も友がない。」の引用から始まり、この言葉を引用するモンテーニュの友人論を経て、ニーチェの「おお敵たちよ、一人も敵がない。」へと展開する。そこから浮かび上がるのは、友愛における距離の重要性であり、「友」と「敵」の近似性である。

本発表では、デリダの目くるめく議論を参照しながら、目をアメリカ文学に転じエマソンやソローの友情観を検討する。その上でポーにおける友／敵のパラドクスへと話を進め、最終的に我々が孤独に苦しむとき求めているのは何なのか、考えてみたい。

社会的排除か、文学的包摂か？

—George Moore の *Esther Waters* をめぐって

関西学院大学教授 横内 一雄

コロナ禍より以前から、先進国の貧困や「社会的排除」(social exclusion)が社会問題となって久しく、なかでも子育ての孤立に起因する痛ましい事件に胸を傷めない日はない。英文学の領域では、19世紀を通じて〈未婚の母〉の苦境はたびたび小説の題材とされてきた。George Moore の *Esther Waters* (1894)もそうした系譜に連なる小説だが、ロマンス的要素を抑えて未婚の母の経済的苦境や社会的孤立を「自然主義風に」炙り出し、その迫真性において群を抜いている。一方、プロットの展開においてヒロインが元の男との復縁を受け入れるとき、読んでいて違和感を覚えるのも事実である。ムアは孤独なヒロインを救ったのか、それとも強引に融和のプロットに従わせたのか？ 社会から排除された個人を、文学は包摂しうるのか？ 小説を丁寧に読んで考えてみたい。

わたしの中の「お友だち」

—— 増殖する自己と “solitude” の行方

関西学院大学教授 松宮園子

ナチス・ドイツによる迫害の只中であつた Anne Frank、そして *A Little Princess* (1905) に代表される少女文学の主人公たちは、自らの想像力を糧に、日記帳や自らの鏡像、あるいは人形といったモノに名前と人格を付与することによって、極度の孤独の中で「話し相手」を獲得した。Hannah Arendt は *The Origins of Totalitarianism* (1951) において “solitude” を「私と自己との対話」と定義したが、擬人化したモノを自らの分身とすることで、これらの少女たちはあるべき “solitude” の形を実現していたと言える。本発表では、この少女たちの「話し相手」の延長線上に、Kazuo Ishiguro の最新作 *Klara and the Sun* (2021) の主人公 Klara を位置付けてみたい。「人間を孤独から守る」ことを使命とする “Artificial Friend” の Klara による語りの中で、彼女が持ち主である少女 Josie の「複製」となることが企まれる本小説の展開は、遺伝子操作の有無によって子どもが二分される近未来社会における「友」そして “solitude” の如何なる行方を示唆しているのか、考察していく。

英語学部門

前置詞をめぐる形式と意味

司会・講師	京都女子大学教授	松原史典
講師	高知大学助教	佐藤亮輔
講師	京都女子大学准教授	谷光生
講師	福岡大学教授	毛利史生

シンポジウムのねらい

本シンポジウムの目的は、前置詞に関わる表現や構文に焦点をあて、その中で前置詞がどのような統語的・意味的役割を果たすのかを明らかにするとともに、そうした表現や構文がどのような統語的・意味的特徴を持つのかを分析することである。さらに、前置詞の出没を決める要因および問題となる表現や構文の構造と派生について理論的な説明を試みる。

本シンポジウムでは、次の4つテーマについて議論する。1) ‘It is kind of you to say so.’ タイプに見られる of の統語的・意味的特徴と本構文の構造と派生、2) 前置詞句倒置構文をラベル決定アルゴリズムでどのように派生させるか、3) 前置詞の出没を動的文法理論でどのように説明するか、4) 部分構文に見られる of の統語的・意味的機能と本構文の構造と派生。いずれの場合も、形式と意味とが密接に関係しているため、統語論と意味論からの多角的な分析が必要である。本シンポジウムでは、理論的枠組みは問わず、こうしたテーマについて何らかの提案を示したい。

‘It is A(adjective) of NP to VP’ 構文における of の意味的・統語的特徴

京都女子大学教授 松原史典

本発表では、(1)に見られるような ‘It is A(adjective) of NP to VP’ 構文に焦点をあて、前置詞 of が示す意味的特徴と統語的ステータスを分析する。その際、(2)に見られる for や in、(3)に見られる on one’s part などの用例を観察しながら議論する。また本構文の歴史的起源にも触れたい。

- (1) It is kind of you to take so much trouble.
- (2) a. It would be foolish for us to quarrel. (OALD³)
 - b. It is kind in you to make such a pretence ... (BNC)
- (3) It was tiresome on John’s part to insist. (Bolinger 1977: 140)

さらに、本構文の形容詞句構造を *aP-shell* 構造を用いて分析し、関連する WH 疑問文や感嘆文の派生を説明する。

前置詞句倒置構文とラベル決定アルゴリズム

高知大学助教 佐藤 亮 輔

本発表では、前置詞句倒置構文を手がかりとして、統語体のラベル決定方法と ϕ 素性一致 (Agree) は分けて考えるべきであると主張する。Chomsky (2013, 2015) のラベル決定アルゴリズム (LA) によると、従来の TP/IP に相当する統語体のラベルは、T/I 主要部と TP/IP 指定部の名詞句が ϕ 素性共有することで決定される。しかし、TP/IP 指定部には前置詞句も生起可能である。例えば、Is [under the chair] a nice place for the cat to sleep? (Stowell (1981: 268)) では、主語助動詞倒置が起きていることから、前置詞句 *under the chair* は TP/IP 指定部に位置していると考えられる。しかし、前置詞(句)は ϕ 素性を持たないため、この事実は LA の見直しを示唆している。本発表では、この事実を説明すべく、新たなラベル決定方法を模索する。

動的な文法理論から見た前置詞の出没現象について

京都女子大学准教授 谷 光 生

前置詞の主たる機能は、(ア) 何らかの事象における空間・時間・様態などを副詞類的な意味関係において明示すること (e.g. *to the hall*), (イ) 何らかのモノに付随する性質を修飾-被修飾の関係において明示すること (e.g. *a woman in red*), および (ウ) 述語-項構造に関わる意味関係を明示すること (e.g. *the giving of one to another*) にあると考えられる。

本発表は (ア) と (イ) を考察の対象とし、次のような具体例における前置詞の出没現象が、動的な文法理論の枠組みにおいては、自然に捉えられ得るとの見通しを示す。

- (1) a. From this station, take that line (*for/*by) two stops.
 - b. The current population of [Cambridge, Massachusetts] is 120,479.
- (2) a. They went on a picnic {(*on) every day / (*on) yesterday / (on) that day / *(on) a beautiful day}.
 - b. ... at least 3 hours of which shall be between [6 o'clock p.m.]and [12 o'clock midnight local time].

なかんずく、前置詞の出没は(個々の語彙に存する意味機能とともに) free association の原理と explication の原理により統率されており、統語構造におけるゼロ形式の乱用および対応する意味解釈規則の乱立を防げるとの主張を行う。

前置詞 of から見た部分構文の統語論及び意味論分析

福岡大学教授 毛利 史 生

英語の部分構文 (1) を取り上げ、前置詞 of の統語的および意味的機能を掘り下げていく。

(1) each of the visitors, three of the students, some of them

部分構文の統語分析に関して、決定辞句主要部 D が直接 PP を補部に据える分析 (Lobeck 1991; Kupferma 1999; Matthewson 2001; Shin 2016) と、D と PP の間に空の NP が介在する空名詞分析 (Hoeksema 1984; Barker 1998; Ionin et al. 2006) がある。第三の分析として内部名詞句 NP の上昇および削除による倒置分析がある (Zamparelli 1998; Falco and Zamparelli 2019)。同じ統語分析でも、of を個体タイプである後方 DP の述語化演算詞として扱うのか、もしくは of の意味的寄与は空疎とするかで議論が分かれる。本発表では、述語化演算子としての of の役割を明らかにし、かつ Zamparelli 流の倒置分析を援用する分析を提示していく。

大会準備委員

委員長： 鴨川 啓信（京都女子大学・英文学）

副委員長： 石川 玲子（相愛大学・英文学）

英文学部門委員：

桐山 恵子（同志社大学）

西出 良郎（神戸女学院大学）

米文学部門委員：

天野 貴史（摂南大学）

大川 淳（京都ノートルダム女子大学）

英語学部門委員：

平井 大輔（近畿大学）

米倉 よう子（奈良教育大学）

開催校委員：

桂山 康司（京都大学）

（五十音順、敬称略）